

《花宴》

二月の二十日過ぎ、南殿の桜の宴を催しなされました。后および春宮の御局をそれぞれ左右に設けて、帝のもとに参上なさります。弘徽殿の女御は、藤壺の宮がこのようにお座りになるのを、その時々ごとに面白くなくお思ひになります。物見の宴にはご欠席になれないので、参上なさっています。

その日はとてもよく晴れて、空の様子、鳥の声も、いかにも心地よい空気の中で、親王たち、上達部をはじめとして、その道の人は皆、韻字を賜って漢詩をお作りになります。宰相中将の、

「春という文字を賜りました」

と、おっしゃる声までが、いつものご本人とは違って素晴らしく聞こえます。次に頭中将です。宰相中将に感心したその目で見られるのも、大変だとお思ひになったようですが、はたから見ても安心できるほどとても落ち着いており、声の操り方など、堂々としてすぐれていました。そのほかの人々は、皆、臆してしまったようできまりわるそうにしているものがたくさんいま

す。地下の人は、いうまでもありません。帝、春宮の詩の御才能が素晴らしく優れていらつしやり、また、このような方面に傑出した人々が多くいらつしやる場面なので、広々として一点の曇りもない庭に出て立つことが、ふつりあい、本来なら簡単なことであるのに、この時ばかりは苦痛なようです。年若い博士たちの、なりは見すばらしくやつれていても、いつものことで場馴れているのも、なるほどと、さまざま御覧になるのは、実に趣あることでした。

舞楽などは、言うまでもなくご準備なさっていました。徐々に日没が近くなるころ、春の鶯が囀るといふ舞が、とても素晴らしく感じられて、源氏の御紅葉の賀の折のことを、自然と思い出されて、春宮が、源氏に挿頭をお与えになって、切に青海波をおせがみになるので、断り難く、立ってゆったりと袖を返すところを一場面だけ、形ばかりお舞いになったところ、似るものなく素晴らしく見えます。そんな源氏の姿を見て、左大臣は、恨めしさも忘れて、涙をお落としになるのです。

「頭中将、どこだ。遅いではないか」

とあったので、柳花苑という舞を、この人はもう少し年長なので、このようなこともあろうかと、心づもりをしていたのでしようか、まこと見事に舞ったため、帝が御衣をお与えになつて、これは本当に栄誉なことであると人々は思つたのでした。上達部たちは皆入り乱れてお舞いになりましたが、夜に入つてからは特に、誰が誰やら分かりませんでした。詩を読み上げる時にも、源氏の君の御作を、講師もなかなか読み上げ切れません。一つ一つ句毎に読み上げては賞賛するのです。博士たちも心の中で格別な詩であると思つていました。

このような折にも、皆がまずこの君を光輝く中心にしていらつしやるのですから、帝もどうしておろそかにお思いでいられますよう。藤壺の宮は、源氏のお姿に御目が止まるたびに、

「春宮の女御が必要以上に源氏の君をお憎みになっているらしいことも私には信じられません……。でも、自分がこんな気持ちになること自体いけないことですわ」

と、御自身思い直さずにはいらつしやれないのでした。

「何のわだかまりもくただ花のような姿を見るのなら

ほんの少しでも気兼ねなどするでしょうか」

御心の中だけであつたはずのことが、どうして世間に洩れ出てしまつたのでしよう。

夜もたいそう更けて宴は終わつたのでした。

上達部はおのおの退出し、中宮、春宮もお帰りになつてしまつたので、すっかり静かになつたところに、月がとても明るくさし出て美しいのを、源氏の君は、酔い心地に見過ごし難くお思ひになつたので、

「殿上の人々もやすんで、このように思いがけない時に、もしかすると都合のよい機会もあるかもしれない」

と、藤壺のあたりを、むやみに人目を忍んでうろついてみたのですが、話を通じるべき所の戸口も鍵をかけてあつたので、思はず溜息をついて、とは言つてもやはりそのままではいられまいと、弘徽殿の細殿にお立ち寄りになつたところ、三の口が開いています。

女御は上の御局にそのまま参上なさつてしまつたので、人が少ない様子です。奥の枢戸も開いていて、人のいる音もしま

せん。

「このようにして、男女の過ちは起こるものなのだ」

と思つて、そつと上つてお覗きになります。女房たちは皆寝ているにちがいません。とても若々しく美しく、並の身分の人とは聞こえぬ声で、

「朧月夜に似るものではありません」

と小さく吟じて、こちらの方に来る者があるではありませんか。源氏はとても嬉しくて、とつさに袖をお捉えになります。女は、恐ろしく思っている様子で、

「ああ、気味が悪い。これは、いったい誰」

とおっしゃりますが、源氏は、

「何が、嫌だというのか」

と言つて、さらに、

「深い夜の情趣を知っているのも、入る月と

浅からぬ御縁があつたからと思ひますよ」

と歌を詠んで、そつと女を抱き下ろし、戸はしつかりと閉めてしまいました。

あまりのこと途方に暮れている姿が、とても身近に感じられ興味を引きます。女は、ふるえながら、

「ここに、人が…」

と、おっしゃりますが、

「わたくしは、全ての人に許されている人間ですから、誰かを呼んだところで、何ということありません。ただ、静かにしていなさい」

とおっしゃる声を聞き、源氏の君であったのかと気づいて、少しほっとしたのです。辛いと思っている一方で、風流を知らない堅苦しい女とは見られまい、と思っっているのです。源氏は、酔心地がいつもとは違っていたからでしょうか、女を逃がすことは残念な上に、女も若くたおやかで、強引な心も知らないに違いありません、かわいいものだど御覧になっっているうちに、あつという間に夜が明けていく様子なので、早くなんとかしなければと、心があわただしくなります。女は、源氏以上にいると思う乱れている様子です。源氏が、

「やはり、お名のりになってください。どうやって、お話しれ

ばよいのです。こうして終わってしまおうとは、いくら何でもお
思いではあるまい」

とおっしゃると、

「辛い身でこの世からそのまま消えてしまったとしたら

草の原までは尋ね探すまいと思えますか」

と言う態度が、色っぽくしつとりしています。

「なるほど。申し上げ損なった言葉でした」

とおっしゃって、

「どこであろうかと露の宿りを分け入るうちに

小笹が原に風が吹くように世間で噂が立っては困ります

わずらわしくお思いになることでなければ、何の遠慮がいり

ましようか。もしかして、おだましになるのですか」

とも言い終わらないうちに、女房たちが起きて騒ぎ、上の御局

に参上して行き違う気配などが頻繁に交錯するので、なんとも

納得のいかない気持ちで、扇だけを逢瀬のしるしとして取り換

えて、その場をお出になりました。

桐壺には、女房たちが多くお仕えしていて、目を覚ましてい

る者もいるので、この様子を、

「何とも、たゆむことのないお忍び歩きですこと」

と、ひそかにつつき合いながら、お互い空寝をしているのでした。

源氏は、床にお入りになって横になられました。寝入ることができません。

「あの人の姿、なんとも美しかった。女御の御妹君に違いない。

まだ世慣れしていない様子は、五か六の君であろうな。帥宮の北の方や、頭中将の氣にいつていない四の君などは、美しいと聞いていたが。かえってその人たちであつたなら、もう少し楽しみもあつたのに。六の君は春宮に入内させようと心決めていらつしやるようだから面倒なこともあるに違いないな。うゝむ、やつかいなことだ。誰なのか尋ねるだけでも紛らわしい。そのまま終わりにしてしまおうとは思っていない様子であつたが、どういうわけで、言葉を通わすべき方法を教えないままにしてしまったのだろうか」

などと、いろいろと思われるのも、心が惹かれるのでしよう。

このようなことにつけても、まずは、

「あの周辺の有様は、格別に奥ゆかしかったなあ」

と、めったにないことだと、思わず思い比べなさるのでした。

その日は後宴の催しがあつて、源氏は女のことを忘れて一日をお過ごしになりました。箏の琴の役をお務め申し上げなさります。昨日の宴よりも、優美で素晴らしく感じられます。藤壺の宮は、暁に参上なさったのでした。

「あの有明の女は、もう退出してしまつたのだろうか」

と、心も上の空で、気が利かない時のない良清、惟光を付けて、様子をうかがわせなさつたところ、御前から退出なさつた時に、

「たつた今、北の陣から、かねてから隠れて止まつておりました車が何台か退出いたしました。御方々の実家の方がいらつしやつた中に、四位の少将、右中弁などが急ぎ出て、お見送りいたしましたのは、弘徽殿のご帰宅であろうと拝見いたしました。尋常でない気配がはつきりわかりまして、車が三台ほどでございました」

と申し上げるにつけても、源氏の胸は高鳴りなさります。

「どうやって、いずれの君と知ることができようか。父大臣などが聞いて、大げさにもてなすのも、どんなものだろう。まだ、その人の様子をよく見定めないうちは面倒なことだろう。そうかと言って、確認しないでいるのも、また誠に残念だろうから、いったいどうしたらよいのか」

と、思い悩みなさって、なんとなくぼんやり横になっていらっしやるのでした。

「姫君は、どんなに淋しいであろう。もうあれから数日になるから、落ち込んでいるのではないか」

と、いとしく思いやりなさります。あのしるしの扇は、桜襲ねで、色の濃い方に霞んでいる月を描いて水に映している絵柄は見慣れています。どこか心引かれる雰囲気を使いならしてありました。

「草の原までは」

と言った姿だけが、心におかかりになるので、

「今まで知らなかった気持ちです」

有明の月の行方を空の中で見失ってしまつて」

と書きつけなさって、お置きになりました。

「大殿にも久しくなまってしまったなあ」とお思いになります
が、若紫の君も気がかりなので、ご機嫌をとろうとお思いになつ
て、二条院へお出かけになりました。見ての通りとてもかわい
らしく成長して、優しく上品な性格は本当に格別です。不満な
ところがなく、御自身の御心のままに教育しよう、とお思いに
なるその理想に、きつとかなっていることでしょう。男による
お教えなので、少し人馴れしてしまったところが混じりこんで
いるのでは、と思われることだけが気がかりです。

ここ数日のお話、お琴などを教え過ぎしてお出かけになるの
を、いつものことと残念にお思いになります。今ではとても
よく習慣づけられていて、むやみに慕いまつわりつきません。

大殿では、いつものように、葵上にすぐには対面なさりませ
ん。なんとなく寂しくいろいろとお思い巡らされて、箏のお琴
を弾くともなく弾いて、

「穏やかに寝る夜はなくて」

とお歌いになります。左大臣が渡っていらして、先日の宴の興

趣があつたことを、源氏に申し上げなさります。

「私も多くの齢を重ね、明王の御代、四代も見てまいったわけですが、この度ののように、詩作が驚くほど素晴らしく、舞、楽、楽器の音色が整って、寿命の延びるようなことはございませんでしたよ。それぞれの道の名人たちが多いこの時節、あなたがつぶさにご存知で調整された結果です。私のような翁さえも、もう少して舞い出してしまいそうな心地が致しましたよ」と申し上げなされると、源氏は、

「特別に調整をしたこともございません。ただ公務として、そのような優秀な達人たちをあちこちに求めただけです。それにしても何より『柳花苑』、本当に後代の模範ともなるにちがいないだろうと拝見しましたが、まして、あなた様が『栄えゆく春』とばかりに立ち出でなさったとしたら、世の名誉でございましたたでしょうに」

と申し上げなさります。

弁、中将なども合わせて参内し、高欄に背中を押し当てつつ、それぞれに楽器の音を調べ、皆で合奏なさる様子は、非常に素

晴らしいものでした。

あの有明の君は、はかなかった夢を思い出しなさって、とてもわけもわからず嘆かしく物思いにふけっぺいらっしやります。

春宮には、卯月ごろに入内させようと右大臣家では思い定めになっぺおられたので、とても堪え難く思い乱れなさっぺいたのですが、男も、お捜しになるのに手がかりがないではないといえ、どの姫君かも分からず、特に心をお許しになれない右大臣家の方面に関わろうというのも、体裁が悪く思いわずらっぺいらっしやる内に、弥生の二十日過ぎ、右の大殿の弓の結に、上達部、親王たちが多く集いなさっぺ、そのまま藤の宴をなさりました。花盛りは過ぎてしまっぺいましたが、他の花が散っぺてしまっぺたようだ、と教えられたのでしようか、遅れて咲く桜、二本がとても美しいのです。新しくお造りになっぺた殿を、姫君たちの御裳着の日のために磨かれ飾られています。華々しくなさる大臣のようで、何事も今風に執り行っぺておられます。

源氏の君にも、先日、内裏で御対面したついでに申し上げなさりしまっぺたが、いらっしやらないということなので、残念だ、

なんとなく見栄えがしない、とお思いいなつて、お子様の四位少将をお呼び申し上げなさつたのでした。

右大臣は源氏に

「私の庭の桜の花が普通の美しさだったとしたら

どうして改めてあなた様をお待ち申し上げるでしょうか」

という歌をお贈りになつたのですが、源氏は宮中にいらつしやる時に、そのことを帝に奏上なさりました。帝は、

「得意顔のようだな」

と、お笑いになつて、

「わざわざそのような言葉をよこしたようだから、早く行つてあげなさい。女御子たちなども大きくなつたところだから、普通のこととは思いますまいよ」

などとおっしゃります。源氏は御装束などをしっかりと着飾られて、たいそう日が暮れたところに、皆に本当に待たれながら到着になりました。桜の唐の綺の御直衣、葡萄染の下襲、裾をとでも長く引いて。

参会者が皆正装であるところに、遊び心あふれる大君姿の優

雅さで、大切に迎えられお入りになるお姿は、なるほど他と全く違っています。桜の花の美しさまでもけおされて、かえってその場の雰囲気を醒ましているかのようでした。

管弦などもとても素晴らしく演奏なさって、夜が少し更けゆくところに、源氏の君は、ひどく酔ってお体の具合が悪いように装いなさって、闇に紛れてその場を立ち去られてしまいました。

寢殿に、女一の宮、女三の宮とがいらっしやります。源氏はその東の戸口にいらっしやって、寄り掛かってお座りになりました。藤の花はこちらの端に面してあるので、御格子をみな上げて、女房たちが外に出て座っていました。袖口など、踏歌の時が思い出されてなのか、わざとらしく出しているその姿を、源氏は、今宵にはふさわしくないとお感じになり、思わず優美な藤壺のあたりを思い出してしまいます。

「気分が悪い上に、本当にひどく酒を強いられて、参っております。申し訳ありませんが、このあたりの物蔭にでも身を隠させてください」

と言って、妻戸の御簾を引き被りなされると、

「あら、困ります。つまらぬ人なら、やんごとない所の縁を頼りにするのですが」

と言う表情を御覧になると、重々しくはありませんが、並の若い女房たちではなく、上品で魅力ある気配がはつきり分かりま

す。
空薫物がとても煙たく立ち昇って、衣ずれの響きも、とても派手な感じにふるまっていて、奥ゆかしく控え目な様子はあるが、感じられない、そんな今風なことを好んでいるこの場所において、高貴な御方々が御見物なさるといので、こちら側の戸口はお閉めになっているのに違いありません。

そうであってはならないこととは言え、さすがに源氏は興味をお持ちになって、「どの姫君であろう」と、胸を高鳴らせて、「扇を取られて、ひどい目を見ました」

と、少しおどけた声で言ってみながら、近寄ってお座りになりました。

「不思議なほど変わった高麗人ですね」

と答えるのは、こちらの心の内を知らないのでしょう。源氏は

返事はしないで、ただ時々、小さく溜息をつく気配がする方に寄りかかって、几帳越しに手をとらえて、

「いるさの山で道に迷っています」

かすかに見た月の姿が見えるでしょうかと

どうしてですか」

と、相手が誰かもわからずにおっしやるのを、女は、がまんできないのでしょう。

「真心のあるお方でしたら

月のない空でも迷うことがありますか」

と言う声、まさにその人だったのです。とてもうれしいのですが…。